陳舜臣さんを語る会通信

NO.43　Aug.　2021

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2021年8月1日

作家の出発点となった、江戸川乱歩賞受賞作　『枯草の根』

皆さまご存じのことですが、「枯草の根」は昭和36年の第七回江戸川乱歩賞受賞作で、陳舜臣さんの作家活動の出発点となった作品です。取り上げるのが遅くなりました。　（編集委員　橘雄三）

「作者の言葉」　陳舜臣

講談社発行、単行本「枯草の根」（一九六一年）には、冒頭に「作者の言葉」として次の文章が付いています。いくつか他の文庫版、全集などにもあたったのですがありませんでした。

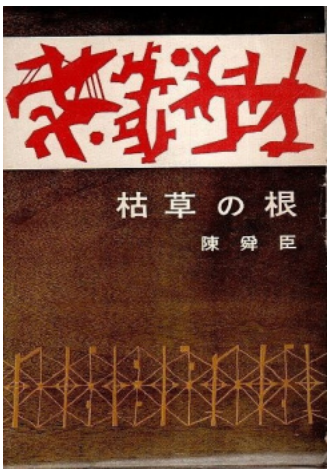
おそるおそるこの処女作を、読者のまえに差し出します。ペンをとっていたときは、出来るだけゆっくり読んでもらえるような、そしてあと味のわるくない作品を書きたい、と念じていました。

いま随所にはりめぐらされている国籍や人種の垣根を、なるべく低くし、風通しをよくしたいというのも作者の念願の一つですが、この小説は特にそれをめざして書かれたものではありません。

『枯草の根』付記の選考経過より抜粋・引用

左に、『枯草の根』に付記されている選考経過から抜粋・引用いたします。この年の応募作、八十六篇の中から最終選考に残った五篇について、江戸川乱歩ほか計五人の委員が選考、「枯草の根」が選ばれた経緯・選評です。

八月四日、最後の選考委員会を開き、数時間にわたって感想を述べあった。そして全員一致して推したのがこの陳舜臣氏の「枯草の根」であった。従来の例によると、入選作と次点作の差が少なくて、論争になることが多かったが、今年は入選作が断然すぐれていたので、そういう論争もなく、全員口をそろえて、この作を褒めあげたのである。



講談社発行単行本の表紙

「枯草の根」の登場人物の多くは神戸に住む中国人だが、それらの人々の悠々たる大陸的風格や、中国風の道義観がよく出ているし、殊に素人探偵役の中国人の性格が非常に面白く描かれている。文章もゆったりとおちついた、おとならしい語り口で、適度のユーモアをまじえ、噛みしめるような味がある。純本格ものでトリックもよく考えてあるし、そのトリックを見破る手掛りに面白い着想が使われている。文中、中国語の引用があり、それがエキゾチックな装飾となっているが、中国語の日記を和訳した文章や、幕切れに出てくる祭文なども名文で、殊にこの幕切れがよく利いていて、あと味がよろしいのである。

乱歩賞受賞当時の陳さん
上掲単行本より

『枯草の根』という題名はどこから?

「枯草の根」の結びです。

もし陶展文だったら、どんな祭文（さいもん）を作るだろうか。彼は考えた。彼なら、「枯草の根を悼む」という文章を書きたい。地中深く張り、まわりの土壌とすっかりなじんだ強靭な根が、にわかに草を失ってしまった。これまで人びとは、土のうえの草しかみていない。根はなおも、いやこれからもっと強く、生きつづけようとするのに。

……こんな内容は、とても祭文にまとめることはできないだろう。

「さあ、タバコもすんだ。はじめようぜ！」

朱漢生の大きな声に、陶展文は我にかえった。

ふと見ると、インキのしみついた駒が、すぐ目のまえにあった。

『枯草の根』 主な登場人物 & 神戸の町

集英社文庫版キャッチコピー

ある日、シンガポールの大富豪が彼の事業を破滅から救った中国人の元銀行家を訪ね、神戸を訪れた。そしてその直後に一人の老高利貸しが殺された。事件の謎解明に陶展文が挑む。

主な登場人物ほか　ネタバレにならない程度に

●**陶展文(とうてんぶん)**　事件の解明に挑む主人公。神戸海岸通、東南ビルの地階にある料理店「桃源亭」の店主。50歳。中国は陝西生まれの福建育ち。日本に留学、東京の高校、大学を卒業。数年間の帰国を挟み、20数年間、日本に居つく。妻・節子、娘・羽容の三人家族。世間からは漢方医としても認められている。父親譲りの拳法が得意。

●**衣笠健次**　桃源亭の料理人。陶展文の妻の甥。展文の拳法の弟子。

●**小島和彦**　中央新聞の記者。陶展文の拳法の弟子。

●**朱漢生(しゅかんせい)**　安記公司の主人。陶展文の弟分のような存在。展文の象棋相手。

●**徐銘義(じょめいぎ)**　もと、上海の興祥隆銀行の計算係。20数年前、銀行を辞め日本へ。アパート「かもめ荘」を経営。陶展文の患者で象棋相手。

●**李源良(りげんりょう)**　桃源亭と同じビルに事務所を持つ五興公司の社長。もと、上海の興祥隆銀行の董事長。

●**席有仁(せきゆうじん)**　シンガポール、瑞和企業の社長。著名な実業家。戦前、事業に失敗、社が危機に瀕したとき、興祥隆銀行の融資で立ち直り、そのことを恩義に感じている。

●**マーク・顧(クー)/李喬玉(りきょうぎょく)**　若い夫婦。マーク・顧は中国系二世のアメリカ市民。2年前、中国からの留学生李喬玉と結婚。喬玉の、日本在住の伯父が交通事故死したことが一番の来日目的。二人の会話からストーリーが始まる。

●**白沢絹子**　田村良作を追って東京から神戸へ。同棲生活は既に解消しているが、田村良作に五十万円の貸しがある。

●**田村良作**　堅気の仕事が性に合わない。面白そうな仕事を求め、叔父・吉田庄造を頼って来神。

●**吉田庄造**　神戸市会議員。地方のボス。業者と官庁の間をとりもち、業者から謝礼金を取っている。また、その金を扱う専属のトンネルさえ持っている。

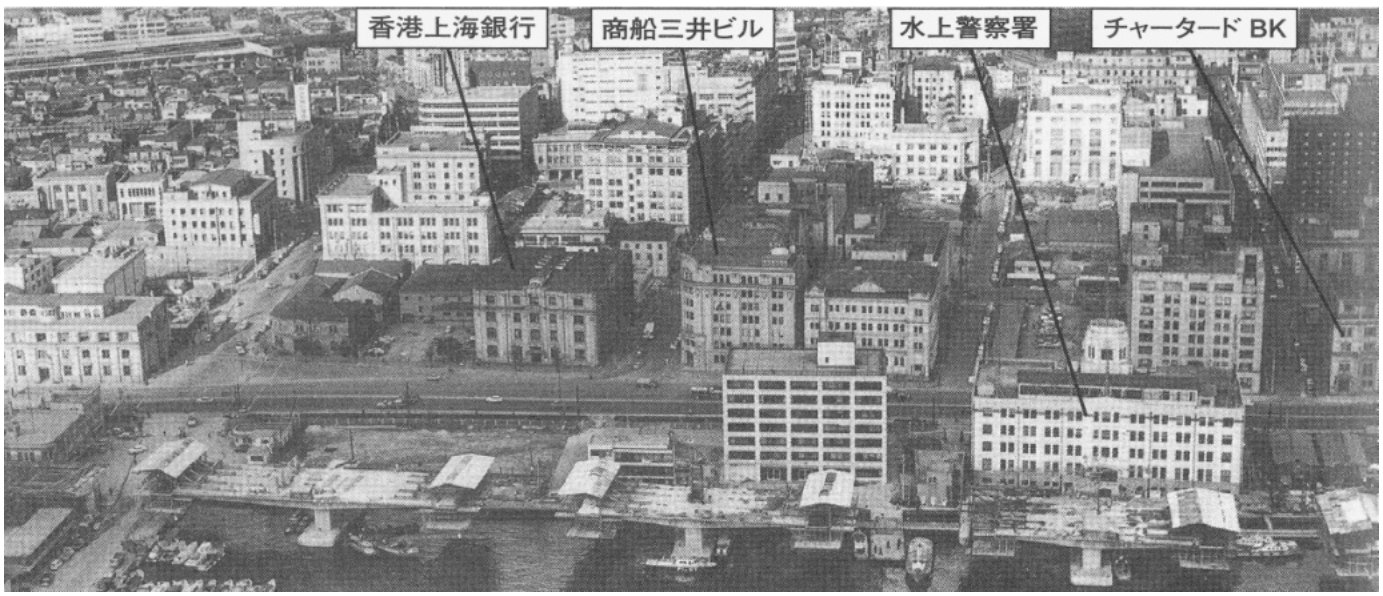
●**辻村甚吉**　徐銘義に脅迫状を送る。

桃源亭■小説では海岸通の東南ビルの地階にある。同ビルの二階に、中国人商社五興公司が入っている。東南ビルは「商船三井ビル」がモデルになっていると思われる。

かもめ荘&安記公司■「かもめ荘」は穴門筋に近い路地のなかにあり、朱漢生の経営する貿易商「安記公司」もそこから遠くない、と記述されている。現在、JR元町駅の東口を南へ出て道路を渡ったところから元町商店街へ突き当たる狭い南北の道路を穴門筋と呼んでいる。しかし、以前は、もっと長い主要な道路であったようだ。

このあたり、**(株)くとうてん発行「ほんまに17号 没後一年「神戸の作家としての」陳舜臣」**に詳しい。下の画像(旧居留地俯瞰一九六五年)も同著から転載させていただきました。

集英社文庫版表紙



『枯草の根』　陳舜臣ファンの読後感想文

「陶展文は陳さんの分身？」

フリーライター　竹内（たけうち） 信六（しんろく）

陳さん一族は河南省→福建省泉州→台湾に移住、私はソ満国境近く興安北省（当時）海拉爾（ハイラル）生まれ。大陸の南と北という共通項のよしみ、と解釈して書かせていただいた。

◇

「告白書」の項まで、これが推理小説？と思いながら読み進めた。まるで大河の水のように悠然と流れている。トアロード、海岸通など、身近な地名を楽しみながら…。登場人物も多彩。冒頭に現れたマーク・顧、李喬玉夫妻が一向に姿を見せない。怪しいぞ、と注意深くページを繰った。

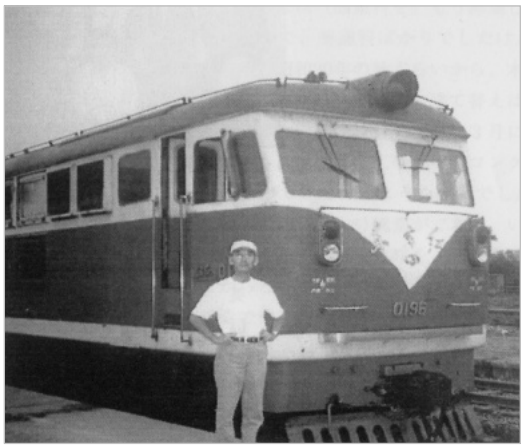
「告白書」は圧巻。殺人犯の名前を明らかにするが、大戦前、後の世情や経済を詳しく紹介するくだりは、陳さんの真骨頂だ。席有仁の幕切れの祭文にも魅かれた。陶展文は陳さんの分身ではないだろうか。陳さんが象（将）棋に詳しいのも、新しい発見だった。

◇

初版が発行された1961（昭和36）年、私は大学一年の秋。ボランティアで子供会活動をしよう、と決めかけていた頃。半面、出自から「日中友好の架け橋になりたい」とも思っていた。この本を読んでいれば、針（進）路が変わっていたかも知れない。

プロフィール■竹内信六

元神戸新聞明石総局長。1942年、旧満州・海拉爾生れ。79歳。2歳の時、母に手を引かれ祖国へ。座右の銘は「一隅を照らす」。著書に「祖国はるか2000キロ」「父に捧ぐ」「改訂 父に捧ぐ」（いずれも交友プランニングセンター）「生かされて77歳」（木下ブンセイ出版印刷）など。



平成十四年（二〇〇二年）七月二八日～八月三日、「ふる里」、旧満州・ハイラルへの旅の竹内氏。

倭寇の頭目、王直（おうちょく）絡（がら）みの作品

集英社文庫『枯草の根』（本号２頁の画像）所収の短編「王直の財宝」にふれます。

陶展文が旧友の息子夫婦とともに五島を訪れ、一首の詩から王直の残した財宝を探るというストーリーです。

王直（または汪直）は実在の人物です。没年は同作品では1559年。中国明代の貿易商人（海商）で、浙江省の舟山諸島を本拠地、日本の五島や平戸を拠点として活動した後期倭寇の頭目です。

王直には作家の執筆意欲をかき立てるものがあるのでしょうか？王直絡みの作品をいくつかあげます。

陳さんの作品では、『戦国海商伝』、『珊瑚の枕』、『景徳鎮からの贈り物』所収「墨の華」などがあります。特に、『戦国海商伝』では、主人公・立花佐太郎とも接点の多い主要登場人物として描かれています。

また、同時代の作家では司馬遼太郎の『街道をゆく11　肥前の諸街道』、新しいところでは、安部龍太郎の『五峰の鷹』などがあります。なお、「五峰」は王直の号です。

小学館文庫表紙 →

乱歩賞受賞時、陳舜臣さんを取材をした神戸新聞記者のエッセイ

陳舜臣さんが江戸川乱歩賞を受賞した昭和三十六年の夏、北長狭通にあった泰安公司の社屋で取材をした神戸新聞の記者、三木康弘氏の回想エッセイを取り上げます。当時の泰安公司社屋のようす(傍線①)、ならびに、陳舜臣さんの子煩悩ぶり(傍線②)がうかがえ興味深い。文章は、講談社『陳舜臣全集22 付録月報』「陳さんから吹いてきた風」からの抜粋・引用です。傍線①②は便宜上の加筆。

昭和三十六年の夏、陳さんが「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞を受賞したとき、神戸の人、というので、私たちの社は色めき立って、当時、学芸部の駆け出し記者だった私を陳さんのインタビューにさし向けた。作家陳舜臣さんから一番早く取材した新聞記者という光栄を、私が浴することになったのは、そのおかげだった。

お父さんの経営する泰安公司（コンス）という貿易商社の事務所で、陳さんに会うことになり…。

（中略）。

①泰安公司は、三宮と元町の間、電車の高架線の山側にあった。木造の建物だったように思う。ソファに腰かけて、陳さんをしばらく待っていたときの、事務所の木の床の踏み心地みたいなものがよみがえってくるのだが、ひょっとしたら、錯覚かもしれない。

いまでも、はっきり思い浮かぶのは、②赤ちゃんを抱いて、高架ぞいの道を歩いてくる陳さんの姿である。はにかんだような笑いを広げ、公司の方へ近づいてくる陳さんの姿だ。抱いていたのは、今から思えば、お嬢さんの由果さんだったのだ。三つか四つのときのことになろうか。陳さんは三十七歳で、お父さんの公司に勤めながら、インド、ペルシャの古典文学を研究し、創作を続けていた。

三木康弘氏■神戸新聞、元取締役論説委員長。二〇〇一年、神戸市の病院で死去、六十八歳。阪神淡路大震災当時の論説委員長。

《1. 戦後、木造平屋だった時代の泰安公司 》

泰安公司の現社長・陳武洋氏は、舜臣さんの弟・仰臣氏のご長男です。陳武洋氏のはなし。

「祖父・陳通は海岸通りの社屋が空襲で焼けた後、北長狭通３丁目のこの地に平屋を建て、会社を移しました。舜臣伯父と父・仰臣、ほか数人の社員が仕事をしていたのはこの時代です。

やがて、舜臣伯父は作家へと道を変え、家業を継いだ父・仰臣は、この地にビルを建設しました。いまの４階建て泰安ビルです。一昨年、竣工50年を祝いました」(2020年7月、電話取材時)

戦後、３年半の台湾暮らしから日本に戻った陳舜臣さんは、1950年、結婚し、家業に取り組むようになります。1961年の江戸川乱歩賞受賞を機に作家生活に入りますが、泰安公司の木造平屋建て社屋は、この間10年、陳さんの職場でした。

この時期の陳さんの職場を具体的に記述した三木氏のエッセイは貴重です。

《2. 乱歩賞、受賞の知らせがあった日 》

北野町の自宅を出て不動坂をくだり、山本通りを抜け、生田神社脇を過ぎ、上述の泰安公司に到る、そして、ほぼ同じコースを戻るというのが、乱歩賞受賞当時の陳舜臣さんの通勤経路でした。

８月４日、帰路のことです。生田神社は夏祭りで、境内で知り合いの岸本君に出会います。『道半ば』から抜粋・引用します。

「おおい、氷をたべて行かんか？」と、例年のように大声をかけてきた。「いや、今日は早よ帰らんとあかんのや」私はカバンを持った手をすこし振った。岸本君と別れて、山本通から北野町の我が家にむかった。その途中でカバンのとっ手がはずれた。カバンのとっ手がはずれたというのは、もうサラリーマン生活はやめよということかな。

三本松の坂にさしかかったところで、妻が娘を抱いて、香港上海銀行社宅前の通りに出て、手を振っているのが見えた。そのころ、私はそこの路地から歩いて二分ほどのところに住んでいた。それまでだれもそこまで迎えに出てくることはなかった。なにか特別なことがあったにちがいない。妻もうれしそうに笑っている。

なにがあったのか、私はすぐにわかった。

現在の泰安ビル（木立の右後ろ）
玄関左手に「泰安公司」の表札

由果ちゃん(イラストは編集委員) →